The39th
Passenger Cars & Motorcycles
TOKYO MOTOR SHOW 2005

News vol.3 平成17年10月22日
第39回東京モーターショー2005 Passenger Cars & Motorcycles 乗用車・二輪車

"Driving Tomorrow!" from Tokyo みんながココロに描いてる、くるまのすべてに新提案。

新しい半世紀へ——

「第39回 東京モーターショー」華やかに幕開け

新しい半世紀へ向けて——「第39回東京モーターショー（乗用車・二輪車）」の開会式が21日、千葉・幕張メッセの国際会議場コンベンションホールで開催された。11月6日までの17日間、幕張メッセを舞台に華やかに繰り広げられるモーターファン待望の“世界のビッグショー”が始まった。

開会式は午前10時30分から。来賓、業界関係者など約900人が出席した会場では、正面スクリーンに東京モーターショー50年の歴史を振りかえる数々の映像ショットが流れる。まず主催者の日本自動車工業会を代表して小枝至会長があいさつに立ち、本年のショーについて「東京モーターショーが1954年に日比谷公園で産声をあげてから50年を経て、新たな半世紀へ入る最初のショーになる」、「また（次開催の）2007年から商用車・商用車ボディも含めた新総合ショーに衣替えするため、乗用車・二輪車ショーとしては最後の開催になる」と、2つの大きな節目を背景にしたショーであることを紹介。次いでショーテーマや出品概要に触れたあと、今回は来場者の混雑緩和を期待して週末が3回入るようにした結果、「世界で一番長いモーターショー」になったと説明し、この会期17日間を通じて歴代名車の展示や燃料電池車、ハイブリッド車などの同乗試乗会のほか過去・未来50年をつなぐ多彩なイベントが開催されると結んだ。

このあと北側一雄国土交通大臣、中川昭一経済産業大臣（代読・小此木八郎副大臣）、堂本暁子千葉県知事、ベルンド・ゴチャックOICA（国際自動車工業連合会）会長の来賓各位が祝辞を述べ、張富士夫自工会副会長の開会宣言に盛大な拍手が送られる中、11時に開会式が終了した。

開会式であいさつする
小枝日本自動車工業会会長

—— 祝賀レセプション開催 ——

なごやかに1,300人が交歓

電気自動車に乗って会場を巡覧する堂本千葉県知事（同乗は張自工会副会長）

歓談する豊田章一郎自工会最高顧問

ショー・ロゴマークの「一」の文字（スクリーン右から2番目）を強調するなど、巧みな映像演出が祝賀レセプションを盛り上げる。

開会式に引き続いて、来賓が2台の電気自動車に分乗し、ショー会場を約1時間半にわたり巡覧。小枝会長、張副会長が同乗して小此木副大臣、堂本知事の熱心な質問に答えていた。

午後1時からは、再び国際会議場コンベションホールで祝賀レセプションが盛大に催された。参加者は約1,300人。

ハープの生演奏が流れる会場のあちらこちらで、祝賀に駆け付けた政・官・財界人や各国の駐日大使、主催側の自動車メーカー・トップを囲むなごやかな交歓風景が見受けられた。モーターショー50年のエピソードを懐しむ声が聞かれる隣で、燃料電池コンセプトカーが話題になるなど、今回ショーの特色を映し出していたのが印象的だ。

特別企画 イベントホール　SPECIAL EVENT

—— 東京モーターショーの50年を振り返る特別展示 ——

年代毎の「名車」を世相と共に学ぼう!!

新半世紀に向け、あらためて「東京モーターショーの50年を振り返る特別展示」が11月6日（日）の最終日までイベントホールで開催されている。一際目を引くのは同ホール中央の車輪を模した巨大なモニュメント。1954年、東京・日比谷公園で開かれた、東京モーターショーの前身「第1回全日本自動車ショウ」の時より採用している東京モーターショーマークは、実はこれがオリジン。隣り合わせで1950年代の展示ゾーンが。同ゾーンを囲むように60年代から90年代まで、半円状に四輪・二輪車合計27台の、往年の名車がズラリと顔を揃えた。

また、各年代ゾーンには解説タワーが設置。映像モニターを通じてその時代の社会現象や出来事がテロップで流され、懐かしの名車と連想しながら楽しめる構成になっている。タワーの脇には二眼レフカメラや月球儀といった、年代別の流行アイテムまで並んでいる。

マリリン・モンローの来日（54年）、マンボブーム（55年）に沸いた1950年代。戦後の混乱を抜けて好景気が押し寄せるなか、日本の自動車産業の再興が始まった。

貧しさからの脱却を戦後の日本人に彷彿とさせてくれたのは、なんといっても56年、RS型クラウンに豪華装備を加え、オーナーカーモデルとして登場した「トヨペットクラウンRSD型」（トヨタ）だろう。1,453cc、48馬力ながら堂々とした体格だった。59年にはジェットラインと呼ばれた、オリジナル・デザインが特徴の「コレダST-6A」（スズキ）がある。フューエルタンクに社章のSマークを初めて付けた二輪車だ。それは日本の自動車メーカーが自信を回復する象徴でもあった。

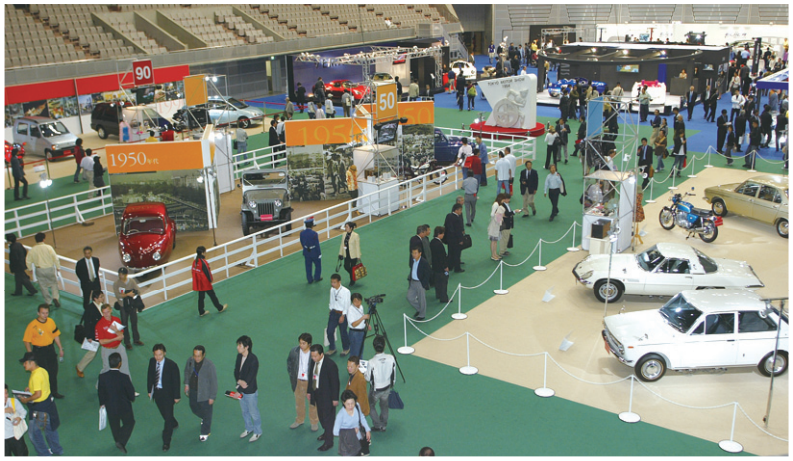
黄金の60年代はダッコちゃんの流行とともに始まる。60年の第7回全日本自動車ショー（晴海国際見本市会場）に初めてコンパニオンが登場し、以後モーターショーは華やかさを増す。64年デビューの「ホンダS600」はS500をベースにスケールアップ。性能、装備とも発展させた輸出対応モデル。国内外のレースでも活躍した。日本で初めてFF方式の量産小型車として名を馳せたのは「スバル1000」（66年）。

67年にはマツダが世界初の2ロータリーエンジン搭載のツーリングスポーツ「コスモスポーツ」（L10B）」を世に送り出す。2輪車の世界でも、量産市販車として世界初のOHC直4エンジン搭載の「ホンダ DREAM CB750 Four」が革新的バイクの名を欲しいままにした。 高度成長を背にマイカーは夢ではなくなり、 日本のモータリゼーションが黎

「赤トンボ」の愛称で親しまれたヤマハの「YA-1」

リッターカーに挑戦した
「ダイハツ シャレード」

今や環境技術のシンボルとなった「プリウス」（初代）



時代の「名車」が語る開催50周年記念イベント

「50周年記念イベント」出品車両一覧

年式	四輪	二輪	会社名	車　名
51年	○		ダイハツ	BEE
56年	○		トヨタ	トヨペットクラウンRSD型
61年	○		三菱	三菱ジープ
59年	○		日産	ブルーバード1200 スタンダード（P310）
55年		○	ヤマハ	YA-1
59年		○	スズキ	コレダ ST-6A
64年	○		ホンダ	ホンダ S600
66年	○		スバル	スバル 1000
67年	○		トヨタ	カローラ KE10 型
67年	○		マツダ	コスモスポーツ
69年		○	ホンダ	DREAM CB750 Four
73年	○		日産	スカイラインH/T2000GT-R （KPGC110）
79年	○		ダイハツ	ダイハツ シャレード（E-G10）
79年	○		スズキ	アルト（初代）
72年		○	カワサキ	Z1
82年	○		いすゞ	117クーペ（後期型）
86年	○		いすゞ	ジェミニ
87年	○		日産	セドリックシーマ
89年	○		マツダ	ユーノスロードスター
82年		○	ヤマハ	RZ250
84年		○	カワサキ	GPZ400R
91年	○		三菱	パジェロ
93年	○		スズキ	初代ワゴンR
94年	○		ホンダ	Odyssey
97年	○		トヨタ	プリウス
92年		○	ホンダ	NR750
99年		○	スズキ	GSX1300R 隼
合計	19台	8台		

明期を迎えた。

大阪万博、歩行者天国の初お目見えでスタートした70年代はボウリング（71年）、パンダブーム（72年）、インベーダーゲームが大流行（79年）。だが、石油・ドルショックに見舞われ、日本は転換期を迎える。クルマの大衆化に加え、交通安全、環境問題に対応する技術開発がスタートした。

72年に発売された「Z1」（川崎重工業）は当時珍しかったDOHC4気筒の高度なメカニズムを採用してベストセラーに。30年以上を経て今も高い人気を保つ。「リッターカーというジャンルを創出した「ダイハツ シャレード（E-G10）」は世界初の4サイクル3気筒1,000ccエンジンを搭載。省エネという時代背景のもと、広くて小さい快適な経済車のコンセプトで開発・発売（79年）された。同年にはまた、「スズキ アルト」が“全国標準現金価格47万円”というCMで大ヒット。軽ボンネットバン需要を一気に拡大した立役者となった。

80年代の日本はバブル時代へ突入する。タケノコ族（80年）、ルービックキューブ（同）、東京ディズニーランド開園（83年）、おしんブーム（同）、阪神タイガースが初の日本一に（85年）という世相は記憶に新しい。この時代、クルマはエレクトロニクス技術と融合してハイテク化への道を突き進む。展示されているいすゞの「117クーペ（後期型）」（82年）、日産の「セドリックシーマ」（87年）、マツダの「ユーノスロードスター」（89年）などはいずれもこの時代を代弁してくれている。

そして90年代。暮しも社会も「人と地球にやさしい」が合言葉となり、日本車の安全・環境技術は世界最先端のレベルへと発展していった。そのシンボルカーとなったのが、トヨタが97年、世界に先駆け開発・発売した量産型ハイブリッド乗用車「プリウス」だ。また、99年の第33回東京モーターショー（幕張メッセ）には、ハイブリッドカーのほか燃料電池車も多数登場して話題を集めたものだ。

バブルは崩壊したものの、ジュリアナ東京（91年）、プリクラに興じ、ガングロ・ルーズソックスの女子高生が街を闊歩した。（97、99年）。

一方でアイボが登場し、携帯電話が普及（99年）して、世相も新しい時代への幕開けを予感させた。93年にスズキが「（初代）ワゴンR」を発売し、軽自動車の新しいユーザーニーズを提案。三菱が4駆の「パジェロ」（91年）でレジャーユースを切り拓き、ホンダの「Odyssey」（94年）登場によってクルマの多目的な使われ方、楽しみ方が拡がっていった。

TOPICS トピックス

東京モーターショーは日本の自動車産業の世界的な成功のシンボル── 開会式でOICA会長が祝辞

OICA（国際自動車工業連合会）のベルンド･ゴチャック会長は21日、東京モーターショーの開会式に出席し、世界41の会員団体を代表して祝辞を述べた。この中でゴチャック会長は「東京モーターショーは日本の自動車産業の世界的な成功のシンボルでもあり、日本が産業立地、技術専門知識、革命力、未来構築力の面において世界的にみても重要であることを確実に示すもの」と強調した。

また、「自動車メーカー、部品メーカーもハイブリッド技術の分野ですでに進行しているように、今後、技術面、販売面でさまざまな企業の連携が増えていく」と指摘し、東京モーターショーは「環境対応をはじめ、これらの課題に各社が取り組む現状を披露する素晴らしい場である」と語った。

開会式で祝辞を述べる
ベルンド・ゴチャックOICA会長

goo 東京モーターショー公認サイト&JAMAホームページ

goo「東京モーターショー公認サイト」
http://motorshow.goo.ne.jp/

JAMA「東京モーターショーオフィシャル WEBサイト」
http://www.tokyo-motorshow.com/

世界有数の規模を誇る東京モーターショーの情報を、豊富かつリアルタイムに配信──大手ポータルサイト「goo」のスポンサーシップにより、「goo　東京モーターショー公認サイト」が開設された。9月には過去の東京モーターショーのコンセプトカーを紹介する記事や今回のショーのプレビュー記事が掲載されるなど、事前キャンペーンを展開していた。19日のプレスデーからは、プレスブリーフィング情報やコンセプトカーの写真などを大量に掲載するとともに、ブログシステムを使って取材スタッフが会場の状況をバラエティ豊かにレポートしている。また日本自動車工業会（JAMA）では東京モーターショーオフィシャルWEBサイトを開設し、「東京モーターショーニュース」等を掲載している。

記者の目

クリエイティブな日本のコンセプトカーに注目しています

La Tribune グランドレポーター
アラン･ガブリエル･ヴェルドヴォワイさん

フランスの代表的経済新聞、ラ・トリビューヌ紙主任記者で、世界のモーターショー取材を経験しているヴェルドヴォワイさん。今回の東京モーターショーについて「テクノロジーや部品も素晴らしいのかもしれないが、僕の興味は何と言ってもコンセプトカー。日本メーカーのコンセプトカーは本当にクリエイティブで、見ていて楽しいよ。日産の大きなモノスペース（「AMENIO」）はとても美しかった。マツダのコンセプトカー（「先駆」）も素晴らしいフォルムだと思う」と語り、ビジネスフェアに絞らず、一般ユーザーに広く訴求するという東京モーターショーの特色を評価していた。

今日のイベント（予定）
2005年10月22日（土）

＊トラフィック戦隊アンゼンジャーショー
10：30～11：00
12：30～13：00
15：05～15：35
フェスティバルパーク（西休憩ゾーン）

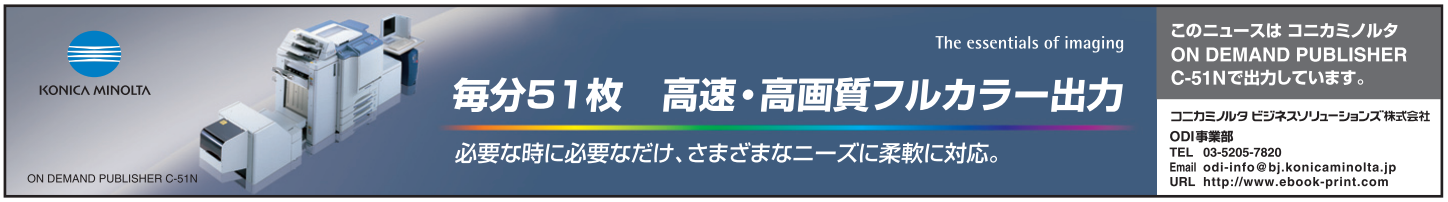
＊トライアルデモンストレーション
11：45～12：15
14：20～14：50
フェスティバルパーク（西休憩ゾーン）

＊交通安全トークショー
13：15～13：45
15：50～16：20
フェスティバルパーク（西休憩ゾーン）

＊クリーンエネルギー車同乗試乗会
10：30～16：30
特設専用コース（幕張海浜公園内メッセ周辺公道）

＊少年少女モーターサイクルスポーツスクール
10：00～12：10
14：00～16：10
（幕張メッセ・中央休憩ゾーン特設会場）

お詫びと訂正：本紙Vol.2におきまして、大橋忠晴・川崎重工業社長とあるのは森田進一・同社常務取締役の誤りでした。お詫びして訂正いたします。



TOKYO MOTOR SHOW 2005　10月21日の入場者数 43,000人

東京モーターショーニュースVol.3　2005年10月22日発行
発行所　社団法人 日本自動車工業会 広報室
〒105-0012　東京都港区芝大門1丁目1番30号　日本自動車会館
TEL.03-5405-6119　FAX.03-5405-6136
WEB SITE www.tokyo-motorshow.com
JAMA